

『「科学的思考」のレッスン ―学校では教えてくれないサイエンス―』

戸田山和久著／NHK 出版

私は「理屈っばい」と思う。子供の頃から「屁理屈をこねるな！」と今は亡き父によく言われた。小学生の頃は昆虫学者を夢見たこともあり、中学生時代にはしばしばクラスメートに「学者みたいだ」と言われたこともある。そして、15歳で高専という理系の道に進んだ。もともと父の家業を継ぐつもりだったのに、気が付けば、工学部の教員という屁理屈で飯を食う職についている。

「理屈っばい」と理系向きだと言われることが多い気がする。普段、情緒的でなく、論理的なことを言う、「これだから理系は」と、や々もすれば差別的なニュアンスで蔑まれる。「理系っばい」ことはイケてないらしい。その一方、本屋の自己啓発コーナーには文系が学ぶ理系思考という内容の本を見かける。私からみれば、考古学や法学、教育学を扱う本は、やけに理屈っばい気がする。そのような経験から研究室の学生と「理系っばいって何だろう？」とくだらない茶話に興じることがある。

ここで紹介する本は、そんな日頃の疑問を解く一助になればと思って手にしたものである。作者は戸田山和久さんという科学哲学を専門とする名古屋大学の先生である。内容は「理屈っばい」のではあるが、非常に丁寧に書かれていると感じた。そして、読者に難しい内容を理解してもらおうという気持ちや工夫が随所に見られる。科学とは何か、科学的に考えるとは何か、そして、なぜ市民に科学リテラシーが必要なのかと、最近のトピックスを巧妙に織り交ぜながら、広範囲の問題を巧みに解説している。技術者や科学者の足元を理解するために本学の学生はもちろん、若い教職員にも読んで欲しいと思う。

専門分野の研究を通して科学的にもの考える方法を身に付けさせることが本学の教員の大切な仕事だと思う。仮説やモデルを立て、実験データを利用して現象の仕組みを理解し、ものを作り込んでいく作法を身に付けさせるのが本学の教員の責務のはずである。その割には、科学的思考を定義し、それを学生にわかりやすく伝えるという努力は往々にして怠ってきた気がする。私も、高専や技大の学生であったが、そういう講義を習った気はしない。それは研究室で「たたき込まれる」ものだとされてきた。

加えて、日本の技術者や科学者は、市民に対する科学リテラシーの普及に関し

でもあまり積極的でない気がする。科学や技術と市民の断絶は、昨今の原発問題を見れば、大きな問題であることは明らかだ。

「理屈っぽい」が論理的でない、専門に明るい科学リテラシーが高いとは言えない技術者や研究者が多い気がする。日本の高等教育にはこういう教育の方向性が足りない気がする。しかし、技術者や科学者個人も考えないといけない問題である。

結局のところ、こういう作法は自分で本を読んで、実践して勉強するしかない。そして、さらに理屈っぽくなる覚悟が必要である。私は、ますますイケてない「おっさん」になってゆくのでしょう。

執筆者紹介

南口 誠

機械系准教授。専門領域は、材料工学、高温物理化学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『「科学的思考」のレッスン：学校で教えてくれないサイエンス』 戸田山和久著
NHK出版（NHK出版新書） 2011年 903円

[ブックガイド目次へ](#)